

Title	皇民文学における国語と軍事動員：周金波「助教」ノート
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.53 (2011. 6) ,p.58- 69
JaLC DOI	10.14991/002.20110600-0058
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20110600-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈皇民文学〉における〈国語〉と軍事動員

——周金波「助教」ノート——

和泉 司

一 周金波の登場と作品

周金波（一九二〇—一九六六年）は日本統治期であった一九四一年に文芸同人誌『文芸台湾』において小説「志願兵」を発表したことによって、日本統治期台湾における〈皇民文学〉作家の代表とされる人物である。そして、そのために戦後／光復後の台湾社会では作家としての立場を失い、現在に至ってもその評価は高いとは言えない。一九九〇年代に台湾の日本語文学研究が盛り上がりを見せた際、周金波のテクストは「志願兵」を中心に注目を集めたが、その殆どが「志願兵」を〈皇民文学〉の代表作として追認するものであり、それと比較して他の台湾人作家とそのテクストが〈皇民文学〉「ではない」ことの傍証としての扱いに近いものがあった。

「志願兵」以後のテクストが、徐々に台湾に郷土としての愛着を示し始め、単なる〈皇民文学〉とは言えない様相を呈し始める、と論じたのは、星名宏修¹⁾や中島利郎²⁾であった。周金波の日本統治期における主な小説テクストは次の通りである。

「水瘧」『文芸台湾』一九四一年三月号

「志願兵」『文芸台湾』一九四一年九月号

「『ものさし』の誕生」『文芸台湾』一九四二年一月号

「フアンの手紙」『文芸台湾』一九四二年九月号

「気候と信仰と持病と」『台湾時報』一九四三年一月号

「郷愁」『文芸台湾』一九四三年五月号

「助教（情報部委嘱作品）」『台湾時報』一九四四年九月号

「無題」『台湾文芸』一九四四年二月号

「遅しき群像」『台湾新報』青年版一九四五年二月一日～三月三十一日

この他評論や随筆を多数執筆しているが、小説にあたるのはこの九編となる（他に題名だけが分かっているものが二編、辻小説が数編ある）。星名や中島が周金波が「郷土としての台湾」を描き始める、と指摘するのは、「気候と信仰と持病」からで、その理由をまとめると、このテクストが皇民化運動の浸透と台湾の土着信仰の狭間に揺れる家族を描いているから、ということになる。この視点はその次の「郷愁」にも当てはめられる。

周金波は幼少期の三年ほど、そして旧制中学校進学（三三年）から日大歯学科を卒業する（四一年）までの約八年を、東

京で過ごしている。台湾で小説を描き始める以前の彼は、台湾よりも日本で暮らした期間の方が長かった。初期のテクストである「水癌」と「志願兵」で語り手や主要登場人物が東京留学帰りの青年に設定されているのは、そのような周金波自身の経歴の反映であり、そのために語り手らの視点には台湾社会を「遅れている」場所として見る態度が現れている。おそらくそれが、「志願兵」以前が（暗示的に）「郷土としての台湾」を描いたものとは見なされない由縁であろう。

しかし、「郷愁」より後のテクストについては、個別的分析が非常に手薄である。周金波が時間と共に台湾を郷土化していったとするならばその次に発表された「助教」にもその変化は現れているのであろうか。

先に結果を言えば、「助教」には「郷土としての台湾」はテクスト前景、また後景としてもほとんど現れない。ここで示されるのは、台湾人の戦争動員に関するプロバガンダであり、郷土性―伝統文化や社会、家族といったテーマは描かれず、もっぱら台湾人青年の皇民化訓練と志願兵あるいは徴兵、そして台湾人青年の〈国語〉能力に関わる点が取り上げられている。

「助教」はその初出時のタイトルが「助教（情報部委嘱作品）」とあり、後述する台湾総督府情報部が皇民化運動・戦争動員宣伝用に企画した『台湾決戦小説集』のために描かれたテクストである。この企画という点にのみ注目すれば、強制されたテーマでやむなく描いたものであるため、「郷愁」までの変化とかけ離れていてもおかしくないとと思われるかもしれない。しかし、このような企画に対応したテクストと考えるには、

「助教」がはらんでいる問題は非常に大きく重大である。何故なら、テクスト中に描かれる皇民化運動の極北とも言える台湾における徴兵制実施に直面した台湾人青年と台湾社会の対応とが、台湾人の軍事動員賛美から、明らかにずれたものを描き出しているからである。本ノートは、今後周金波の後期小説テクスト分析を進める上での起点として「助教」のはらむ問題点を指摘することを目的とする。

二 『決戦台湾小説集』について

日本帝国の大政翼賛運動に呼応して、台湾では一九四一年四月に皇民奉公会が結成された。その後、台湾の作家・詩人団体であった台湾文芸家協会は一九四三年四月に台湾文学奉公会に改組され、皇民奉公会の下部組織となった。これは戦争協力のために台湾の文芸家・芸術家を一元化するための措置で、台湾文学奉公会は軍報道部、総督府情報課、日本文学報国会台湾支部の影響下にあった。

この台湾文学奉公会に対し、総督府情報課から作家を戦争動員がかけられている「生産現場」への派遣と、その見聞をもとにしたテクストの発表が要請された。台湾文学奉公会の機関誌であった『台湾文芸』の四四年八月号に掲載された「作家派遣について」という記事には、次のようにある。

総督府情報課ではこの度、第一線基地台湾の各局面に於て、戦力増強に敢闘する島民の姿を描いて文学作品となし、島民の啓発に資するの目的を以て作家派遣の計画を立

て、文学奉公会に協力を求められた。文学奉公会は情報課と協議の上会員十三名を選び、この要請に応じ各一週間の日程を以て左記個所に派遣した。

台中州下謝慶農場 呂赫若

日本アルミニウム工場 濱田隼雄

台湾船渠工場 新垣宏一

鉄道部各機関 西川満

太平山 張文環

高雄海兵団 龍瑛宗

公用地 吉村敏

金瓜石銅山 高山凡石

大平山及公用地 長崎浩

台湾纖維工場 楊雲萍

石底炭坑 楊達

台南州下斗六国民道場 周金波

油田地帯 河野慶彦

この計画は単なる表面的見聞に終ることなく、真に現地
で挺身する人々の息吹に触れ、その労苦を味ふため一週間
内外現地に滞在し起居寢食を共にして、その間の見聞体験
を素材として小説を書く、といふにあつた。僅か一週間の
体験で小説を書くといふことは無理なことでもあり、又場
所によつて題材を得ることの難易のあることも分かつてゐ
た。が、作家の文学精神が現地の厳しい現実を遭つて火花
を散らすところ、そのに何ものかが生まれ出づることが期
待せられた。(略)

この企画に従つて発表されたテクストは、情報課の斡旋によつて皇民奉公会機関誌『新建設』、総督府機関誌『台湾時報』、『台湾新報』系列の『旬刊台新』そして『台湾文芸』に掲載された。ダグラス・L・フィックス⁽⁶⁾および中島は、この企画に選ばれた作家の過半が台湾人作家だつたことに注目している。これまで文芸関連の企画で台湾人作家の比率が日本人作家のそれを上回つたことがなかつたからである。その理由について中島は、この企画によつて視察される地域で働き、または訓練を受けている人々はほぼ台湾人であり、それらの人々の中に入つて状況を観察するには、台湾語・客家語を解する台湾人作家でなければ不可能であつたからだ、と想定している。またここで描かれるテクストの想定読者が台湾人（の小説読解力のある知識階層）であり、そのような読者を満足させる意味でも、より台湾社会に入り込める作家が求められた結果であるとしている。

四四年七月に視察を終えると、その月のうちに派遣作家によるテクストの発表が始まり、同年一二月に台湾出版文化株式会社から『決戦台湾小説集』乾の巻・坤の巻の二巻が、各一万部と台湾の読者市場規模を考えると破格の部数で発行された。

周金波「助教」は、この企画の中で描かれ、そして『決戦台湾小説集』坤の巻に収録されたのだつた。視察地、視察期間、執筆期間、執筆枚数（三十枚）まで限られた中で、「助教」は異彩を放つほどに練られたテクストとなつて⁽⁸⁾いる。

周金波が派遣されたのは台南州斗六郡に作られた国民道場であつた。ここは台湾人への徴兵制導入（一九四四年九月一日実施、徴兵検査は四五年一月より開始）が目前に迫り、〈国語〉

の普及が急務となった時期、徴兵適齢青年への「国語」教育と並行して教練を課す施設であった。訓練期間は十五〜二十五日程度で、軍事教練や天皇崇拜に関する儀礼の体得、さらに「国語」や算数などの学科教育も行われた。

「志願兵」から三年を経て、新たなテキストを発表しても、なお日本人側が周金波に期待していたのは「志願兵」的なテキストであり、「志願兵」作者の周金波であった。それが派遣先が生産現場ではなく国民道場となった理由であろう。

三 不釣り合いな蓮本と国民道場

周金波「助教」は、斗六国民道場を舞台とした小説である。主人公で視点人物は蓮本弘隆という青年で、中学校を卒業して国民道場へ入っている。テキストは、蓮本が国民道場の訓練期間を終える際、日本人の山田教官から、助教（国民道場参加者に対する学科教員）として道場へ勧誘されることから始まる。山田教官は蓮本の国民学校時代の恩師であり（つまり山田は本来小学校教員ということになる）、蓮本はその勧誘を非常に断りにくいものと感じ、悩んでいる。

まず蓮本について確認をしておきたい。彼はテキストを読み進めればすぐに分かるように、台湾人青年である（そもそも国民道場に日本人子弟は入所しない）。その彼が「蓮本弘隆」という日本人的な名前を持っているのは、改姓名をしているからであろう。

一九四〇年に府令第一九号によって、台湾人の改姓名は許可制として公布・施行されている。その際の許可要件は、「国語

常用の家庭なること」「皇国民としての資質涵養に努むるの念厚く且公共的精神に富める者なること。以上の二条件を具備し、且知事又は庁長に於て適當と認める者に限り許可」というものだった。近藤正巳によれば、改姓名を實際に申請した人々も、許可件数も共に少なかったという。改姓名は条件からいって、一定以上の富裕層でかつ日本型教育を受容している家庭・一族しかできないものだった。蓮本が中学校を出ていること、そして助教就任を迷う際に、「今の彼（蓮本―引用者）としては先づ差し迫って職に就かなければならない理由はなかつた」という箇所から、蓮本の家がその条件を満たすだけの資格を持つことが推測できる。

しかし、このとき気になるのは、なぜ中学校を出ている蓮本が国民道場に入所しているのか、ということだ。

『新建設』四三年一月号の記事「徴兵制実施に備へて」の中で、斗六の国民道場の紹介がされている。国民道場では「特に規律、礼儀に重点を注ぎ、各個教練の基本動作を授けてある」「教練的なものは国民道場で課す」「食事被服の整頓その他軍隊へ入つてまごつかないだけの作法を教へる」としている。このとき、入所対象としているのは、主に農村青年である。国民道場では「国語」や算数などの学科や農業指導も行っており、同記事でも「農閑期を利用して適齢青年の長期訓練を行うことにしてゐる」とされている。出身階層的にも、学歴的にも、蓮本は国民道場にはふさわしくない人物であることがわかるだろう。

テキストでは、蓮本の中学校の同窓生達が海軍工員や軍属と

なっていたり、「予科練にいつたもの六名、甲種飛行機操縦生にいつた三名、陸海軍諸学校に七名、海軍志願兵に二名、軍通訳に二名、その他軍属二名、そして卒業近くどかつと一ぺんに志願した特別幹部候補生」となっている状況が語られ、「台湾に居残つてゐる者は僅か数名」となっている。

具体的に挙げられている数字を合計した時、明確に軍隊あるいは関連機関で働いているのは二五名にすぎない。特別幹部候補生が一体何名に上るのは不明だが、これは四三年度から台湾へ適用された特別志願兵制度の特例で、「専門学校以上」の学校に通う学生を幹部候補生とするもので、つまり「どかつと一ぺんに志願した」同窓生達は、中学校を卒業後、高等教育機関に進学した面々なのである。専門学校や大学へ進学した植民地出身者は、総督府から学校を通じて事実上志願の強制をされていた¹⁾。それを考える時、連本の同窓生の自発的な戦争参加比率が高いとは言いがたい。が、定期的に、戦争参加の強制が中学校卒業者まで迫っていたことも事実である。

そのような時期に連本が国民道場へ入ったのは何故だろうか。彼の本来の目的は「医専」進学である。日本統治期台湾では、台湾人青年が就職・職業差別を比較的受けにくい医師を目指す傾向が強かった。さらに、理系である医専への進学は、予想される徴兵の猶予にもつながる。もともと、台湾の特別志願兵制度では、中学校卒以上の学歴を持つ者の選抜率は著しく低く、基本的に学歴の低い階層の男子が選ばれていた。故に連本には、自身が同制度に志願するという選択肢はなかったであろう。しかし、医専に落ち、浪人状態になったとき、富裕故に

就職の必要性はない、とはいえ、進学も戦争参加もしない無為の状態にいることは、心理的にも社会的にも許されなかったのではないだろうか。そのとき、連本の前に、国民道場があったのである。ここで訓練を受けたという「言い訳」が、彼の無為に対する心理的社会的負担を軽減させる、はずだったのだ。

しかし、国民道場において不釣り合いに高い学歴を持つ連本は教官に目をつけられてしまう。つまり助教就任を要請されてしまうのである。テキストで連本が助教就任を迷うとき、その理由は明示されない。連本は道場の様子を「中学校の廠舎生活を彷彿させるものに過ぎない」と一歩引いた視点で眺め、その生活に「苦痛は印象に残つてゐない」「馴れてしまつた」といつつ、「再び助教となつてさうした雰囲気足を踏み入れる気にはどうしてもなれなかつた」という。

連本に提示された助教の待遇は悪いとは言えない。勧誘した山田教官は、助教をしながら医専の受験勉強をすることも認めている。勉強時間が減つてしまうことは重大かもしれないが、先の入試を「体格で落ちた」と判断しているところを見ると、連本は学科には相応の自信があるのだろう。

とするなら、彼が助教就任をいやがるのは、国民道場の青年達と自分との階層やハビトウスの差を認識しているからだ。連本はテキスト内で、しばしば内務班長の台湾人青年たちに違和感を表明している。無論、内務班長達は熱心に皇民化を目指しているため、その行動を批判する言説は一切ない。しかし、同時に連本は自分が彼らに溶け込めないという意識を隠さない。

テキストでは、国民道場の青年達が一部生（国民学校卒）、

二部生（国語講習所修了）、三部生（国語不解者）で構成されていると述べられている。これだけでも、中学校卒の蓮本がかなり異端であることが分かる。同様に、他の道場生たちも、蓮本の存在はもてあましただろう。特に内務班長（国民学校卒業程度で〈国語〉能力が高い者が就いている。テキスト中では、その殆どが志願兵として日本軍に参加予定となっている）は、中学卒業者が部下の班内班長としていることに指揮の困難、あるいは嫉妬や反感を持ったことも日本軍の系譜から考えれば十分想像できる。道場での訓練を終えて、中学校卒であるという理由で、部下であった蓮本が上司の助教になるということも、内務班長達には快いことではなかっただろう。

そのような雰囲気、蓮本自身も分かっていたのではないだろうか。蓮本の道場入所は進学前のモラトリアムに近い。そのような姿勢も他の道場生の反感を呼ぶだろう。それが分かっている、なお道場に就職するのは、むしろ恐ろしいことであつたかもしれない。しかし、特別志願兵制度や特別幹部候補生制度が、事実上強制されていたことを考える時、山田教官の助教への勧誘もまた、断ることができない強制であつた。蓮本は、助教になりたくない、という意志を語っても、この勧誘を断る、という選択は最後まで想定しなかつた。それは当然、断ることではできないとわかっていたからだ。

その意味で、蓮本を勧誘した山田教官は、そういった青年間の心理を忖度せず、蓮本の気持ちも事実上無視している点で、道場生たち―台湾人青年達への関心が実際には低かつたと判断できる。少なくとも、蓮本にはそのように見えていた。それ

が、助教就任後、恩師であつたはずの山田教官の視線を、蓮本が常に気にし続けることにつながるのである。

四 山田教官の沈黙に対する蓮本の反応

結局助教に就任した蓮本は、やはり国民道場の雰囲気になじめない。彼は「算数歴史の学課」「主に営内勤務、教練」を分担しているが、助教の任務は同僚の寥助教の「国語作文の学課と庶務、経理」というところからもわかるように、学科教育とデスクワークである。それらは、教練を主眼とする国民道場においては中心的なものとは言えない。しかし、その立場は教練を指導する内務班長よりも上となる。そのような雰囲気と制度上の立場の齟齬が、さらに受験までの「腰掛け」である蓮本に居心地の悪さを与えていた。蓮本は、内務班長達の論議を「空回りする車輪の喧騒さ」と見て、その中に入るのを躊躇する。一方内務班長達は、蓮本の授業を隣室で聞き、「蓮本助教殿の授業法は全く要領がいい」「やさしい先生」などと、褒め言葉か皮肉か判断が難しい評価を投げかける。

蓮本が内務班長達に気後れするのは、彼らが近いうちに志願兵となるからでもある。蓮本は「これら内務班長と一緒に働いてゐるとき、なにが譲らなければならぬといふ気持」を持つが、それは彼が国民道場という、将来敷かれる徴兵制度によって戦場に行く道場生をそのために指導し、志願兵制度で戦場へ行く内務班長たちの上に立ちながら、自分は戦場へいくつもりがない（蓮本は、自分も志願するとは一切口にしない）、戦場へ行くことを回避しようとしているからだ。そういった後ろめ

たき、居心地の悪さを感じさせることが、蓮本が助教就任をいやがった理由であったろう。

内務班長達になじめず、それ故体罰も行うことができない蓮本は、藤井教官に言われた「内務班長は父であり、兄である。助教は母であり、姉である」という言葉を想起する。軟弱なのではなく助教とはそのような存在なのだという意識に置き換えることで、自分の立場を正当化しようとするのである。

しかし、そのような蓮本がどうしても克服できないのが、山田教官の沈黙であった。それが最初に顕現するのは、立川―おそらくこの青年も豊かな階層出身の台湾人であろう―という道場生が脱柵を試み、捕まった事件の際であった。内務班長達が「見透いた嘘」で言い逃れようとする立川を取り囲む中、山田教官は「無言で見守つてゐる以外何等手段をくださなかつた」。それが蓮本に「地団駄を踏んで、齒を喰ひ」しぼらせる。

このとき、蓮本は山田教官の道場生への無関心を恐れている。山田教官の沈黙に耐えられないと感じた時、陳進録内務班長が「おまへはそれでも日本人か、日本人か。」と立川を怒鳴りつけることで、蓮本は「心の安定と負担のとれた明るさを同時に感じた」。陳進録の発言が自信に満ちていたからである。それはもちろん、「自分（たち）は日本人である」という自信だ。しかし同時に、「若しこの言葉が山田教官に依つて先にはれたなら、さう思ふと蓮本は憚つと」なる。つまりそれは、山田教官が、自分（たち）台湾人青年を、「日本人」とは思つていないことを意味するからだ。蓮本は、〈皇民化〉に迷いなく邁進する集団に違和感を感じながら、日本人教官から非「日

本人」と見なされることに堪えられないと感じるという矛盾を示しているのである。

この矛盾は、山田教官、藤井教官が、道場生は正規の軍人ではないので、宮城遙拝の形式を軍隊式から一般人の形式に改める、と伝えた際に増幅する。内務班長達は、自分たちはやがて志願兵になり、軍隊式の形式が許されることになるのでそれを容認するが、蓮本は、自分が「日本人」から排除されると感じるのである。

道場内で「日本人」であることを証明するには、軍隊へ入るしかない。しかし実際には、台湾人が軍属や志願兵として入隊しても、そこではさらなる差別が待っていた。彼らが内地人同様の「日本人」になることはなかつた。しかし、台湾人だけの共同体の中では、その比較と競争によって、より「日本人」に近い方、になることができた。従来の日本統治下台湾社会では、〈国語〉能力の高さと、近代化―高学歴者であることが、「日本人」への接近手段であり、蓮本はその点では道場内でもっとも「日本人」に近い存在だった。しかし、皇民化運動と台湾人の戦争動員が、言語能力や近代性ではなく、国家―天皇への忠誠といった精神性を評価軸に加えるようになった。それはむしろ近代性とは齟齬を来す要因であり、また戦争・軍隊といった、富裕層・高学歴層の持つ文化資本が通用しない共同体への参加は躊躇われるものだった。それ故、蓮本はそこに近づくことができないのである（この構図自体は、「志願兵」にも相似する¹³）。

そのための違和感に、さらに山田教官の視線が追い打ちをか

ける。山田教官の無関心、にみえる視線が、蓮本の「日本人」性を全て否定しているかのように感じ始めるからだ。自分自身は別の立場にいると考えている道場生や内務班長達が、山田教官という「日本人」の目には、違いない同じ「台湾人」に見えるのではないか、という恐怖から、蓮本は逃げられないのである。

それが、テキスト終盤の、蓮本の失態場面に現れる。可愛がつっていた三部生・蔡樹根が、借り出す実銃の番号が書かれたメモの入っている上着を（「国語」不解の故に）誤って洗ってしまった、メモが失われたとき、蓮本はそのショックから責任を蔡樹根に押しつける。

——僕は大事に、大事に蔵っておいたのであります。ところが蔡樹根のやつは僕の言ひつけたことを聞き違へて——さうだ。あいつは国語不解者であります。上司の命令がわからないのであります。

と叫んだ。二度、三度と叫びつづけた。

これに対し、藤井教官から「おい、おい、蓮本助教、見苦しいぞ、部下の所為にするな。責任は自分一人に帰すべきだ。それが日本人だぞ。」と責められ、蓮本は自分がその場の誰よりも「日本人」性に劣る行動をしたことを思い知らされる。蓮本は内務班長達にも無様に許しを請い、そして山田教官に詰め寄る。

——山田教官殿。蓮本は日本的素養に欠けてゐたでせうか。蓮本をどうおもはれますか。何卒聞かせて下さい。

その声は慄へを帯びてゐた。目には涙が光つてゐた。

山田教官は彼を見下したまゝ、

——何ともおもつてゐないよ。

——それはどういふ意味でありますか。

彼には山田教官の短かい言葉が不満であつた。不安であつた。もつと痛烈な言葉が欲しかつたのだ。

——山田教官殿。山田教官殿。

と呼びつづけながら彼は地べたを這つた。

テキスト末尾で、この場面は高熱で倒れた蓮本の妄想であつたかのように描かれる。濡れ破れたメモはなんとか判読可能で、寥助教が代わりに銃を引き取りに行くことで問題は片付いていた。山田教官も、蓮本に「君の責任感立派だ。立派だとおもつてゐるよ。」と、ベッドに寝かされている蓮本に優しく声をかけている。最終場面では、蓮本が恐れ続けた山田教官の視線は、蓮本の被害妄想であつたようにまとめられるのである。

蓮本が山田教官に対して抱いていた感情は、彼の「日本人」観の投影でもある。蓮本は山田教官の沈黙から、自分の「日本人」性に不安を覚えるようになっていた。蓮本は、日本統治下の学校制度の中で学歴とそれに相応する「国語」能力を持つていることによつて、自分の「日本人」性を担保してきており、

国民学校卒業程度の内務班長達の「皇民化運動」の延長上にある精神論的な「日本人」意識を、内面では正当な「日本人」性と認めていない。それが蓮本が内務班長達に違和感を覚える原因であろう。一方で、この時蓮本は自分自身は近代人というレベルで「日本人」であるという自負を密かに持っていたのだが、その自負が、山田教官の沈黙によって無意味なものとなされているのではないか、という不安にとらわれていくのである。つまり、蓮本にとって、道場での生活は「台湾人扱いされたくない」という、極めて混乱し矛盾しそして民族的な自己認識の倒錯を引き起こすものとなっているのだ。

五 〈国語〉能力と徴兵制―問題提起と課題

では、蓮本以外の台湾人青年達は、この圧力に耐えうるのだろうか。それを判断することは難しい。なぜなら、このテキストは蓮本の視点で描かれており、また「小説を書ける台湾人によって書かれた小説」である以上、すぐれた〈国語〉能力と近代知を持った視点から離れることができないからである。

つまり、このテキストは必然的に〈国語〉不解惑や国民学校出の視点や立場を描けないし、そこに踏み込んでいくこともできないのだ。それは、テキスト中、内務班長や道場生の心理描写が一切ないことに現れている。そして同時に、日本人教官達のそれも描かれないうちに、このテキストが蓮本に代表される知識人である台湾人の視界から自由になれないものであることがわかる。

このような世界では、〈国語〉不解惑や内務班長たちの描か

れ方は単調にならざるを得ない。〈国語〉能力の不足と、近代知、教養、学歴に裏打ちされた社会的立場がないとき、彼らの選択肢は最初からほとんどない。つまり、〈国語〉を学べ、道場で訓練を受ける、戦争へ行け、と言われれば、それに従う以外になく、それを疑問にも思わないのである。テキスト内に描かれる道場の三部、生たちの〈国語〉は、教官や助教、内務班長たちに命じられたことのオウム返しである。そこに個人的な感情や意識がこめられる時は、〈国語〉は混乱し「失礼」な形式になり、そして上司のいないところでは母語である台湾語を使うことになる。彼らは命じられているからその通りやるのみで、故に雨中行進訓練時に、その態度を林慶逢内務班長から、「俺が教へたことを右の耳で聞いて左の耳から出して平気な顔をしてゐる」と責められる。彼らには十分に理解できない言語によって伝えられた命令を、理解できないことによって責められる理不尽の中に、道場生は日常的に置かれているのである。蓮本が助教就任を受諾した時に届けられる、三部生・頼財木に届いた弟からのハガキは、〈国語〉で書かれている。弟は、当然兄である頼財木が〈国語〉を読めないことは知っているはずである。しかし、弟は頼財木に〈国語〉で書かざるを得ない。道場では〈国語〉以外は使ってはならず、もし用いれば責められるのは兄だからだ（ただ、仮に台湾語で書いたとしても、識字の点で頼財木が読めたとはいえない。つまり、ハガキという伝達手段自体が、三部生には授受不可能なものといえる）。このテキスト内で、〈国語〉不解惑は、常にこの理不尽な強要に晒され続けており、そのためにそれが理不尽であるとい

うことさえ気づくことができないのである。

では、〈国語〉理解者である内務班長たちはどうだろうか。

彼らは、〈国語〉が理解できるのだから、〈国語〉使用に発する理不尽な強要に気づくことができるのだろうか。

気づくことはできるかもしれない。しかし、気づくことはできても、それを克服する手段や意識を彼らは持っていない。少なくとも持つていることをこのテキストは描かない。内務班長達は基本的に国民学校（公学校）を卒業しただけなので、〈国語〉能力以外の社会的に通用する技術や資格を持っていない。そのため、軍隊への動員がなければ、日本人の命令を理解することができるといふ以外には社会的な有用性を——もちろん日本人支配の社会の中で——認められない人々であった。軍隊は、彼らにとって、むしろ唯一のスキルである〈国語〉を最も高く評価「してもらえぬ」職場なのである。現実の立場や扱いはともかく、志願兵になることは表面的に役所や総督府という公的機関から賞賛される選択であり、日本統治下においてほとんど能力を評価される機会のない彼らにとって、それは非常に魅力的なものに見させられたであろう。

そして、このテキストが結果的に明らかにしているのは、このような〈国語〉理解度によって台湾人青年たちが区別されていることと、それが徴兵制導入直前時期においてもかなり深刻なレベルで起きているということである。「助教」は国民道場の有り様を基本的に賛美し、内務班長の言動を中心にその皇民化の精神の体現であるかのように描いているが、同時に皇民化運動の精神性をまるで理解できていない三部生の姿や、皇民化

運動自体に実際にはコミットする必要を見出していない蓮本が語り手となっている時点で、軍事動員すべき台湾人青年たちが「ばらばら」であり、日本帝国によって「ばらばら」にされていることが浮き彫りになっているのだ。

四五年の徴兵制実施が近づくと、台湾の新聞・雑誌メディアは徴兵制の特集を幾度となく組むようになる。皇民奉公会の機関誌である『新建設』は特にそれが多く、その中で繰り返しされるのは〈国語〉の問題である。太平洋／大東亜戦争が始まるまで、台湾の台湾人向け初等教育は有償だった。それが義務教育への参加や〈国語〉理解率上昇を阻んでいた。それが無償化されるのは戦争が始まってからである。つまり、義務教育の実施は、台湾人の戦争動員のためであるというしかない。さらに、徴兵制導入に到って、台湾に初めて国政参政権も与えることになった。一般の台湾人にとって、教育と参政権は、その生命と引き替えてあり、さらにその条件に〈国語〉を要求されるのである。四五年の徴兵制実施後は、当然ながら〈国語〉能力の高低に関わらず、対象者は一律に兵役に就くことになる。それは、台湾の（植民地の）現実を無視したことであるし、軍隊内部の規律や混乱も度外視した政策であろう。ただ、徴兵制度は四五年以降に対象年齢（二十歳）に達する青年だけが対象で、四五年に二一才以上になっていた人々は徴兵されなかった。彼らは「温情」によって特別志願兵の道が用意されていた。内務班長達が皆一様に志願兵となり、徴兵制度の対象となっていないのはそのためである。いづれにしても、四五年に二十歳になった青年達は、二十歳を超えた人々よりも相対的に教

育が普及していたであろうから、当局はそれにも期待していたと思われる。また、「助教」の舞台となった国民道場のような〈国語〉と軍隊的規律の速成教育を施す養成所を緊急に創り出すのもそれが理由であった。しかしそれで全てをカバーできるはずがなく、それがメディアでくり返し〈国語〉普及が訴えられていた背景にある。メディアに登場するのは皇民奉公会の幹部や在郷軍人、台湾軍の軍人だったが、彼らは現場に訪れるであろう混乱に誰よりも自覚的であり、それを恐れてもいたからだ。

冒頭で、「助教」というテキストが「生産現場」への「作家派遣」と『決戦台湾小説集』編纂のための企画の中で描かれたものであると述べたが、同時にもう一つの「企画」にも組み込まれていた。「助教」が掲載された『台湾時報』一九四四年九月号は「徴兵制実施記念特輯号」とされ、誌面は徴兵制実施に関する記事で埋められていた。「助教」はその記事の一つだったのである。

つまり、「助教」は生産現場派遣の報告文学的な要素と共に、徴兵制実施のプロパガンダも要求されていたことになる。あるいはそれが、このテキストが規定枚数の二倍近い長さになった理由かもしれないが、このテキストは二重の要求に応えるために大きなストレスがかかっていたことが想像できる。しかし、そこに描かれているのが、台湾人青年の速成養成の困難さであり、〈国語〉理解レベルの低さであったことを考える時、そのような様子が徴兵制度にも志願兵制度にも皇民化運動にさえも

実質的にコミットしない台湾人青年によって語られる時、そして、それを描いたのが「皇民作家」の代表格とされる周金波である時、「助教」が露わにする問題は、日本統治期台湾の日本語文学にとってはおそらくのこと、日本帝国植民地における〈国語〉教育政策やそれに結びつけられた軍事動員を考える上でも非常に重大なものとなる。その点を指摘し、今後の研究課題として示すことで、本ノートのまとめとしたい。

- (1) 星名宏修「もう一つの『皇民文学』・周金波」「野草」第四九号（一九九二年）
- (2) 中島利郎「周金波新論」「台湾文学の諸相」（緑蔭書房 一九九八年）及び「つくられた『皇民作家』周金波」「台湾文学研究の現在」（緑蔭書房 一九九八年）
- (3) 中島利郎「日本統治期台湾文学小辞典」（緑蔭書房 二〇〇五年）を参照。
- (4) 一九四四年に『文芸台湾』と『台湾文学』を半強制的に合併させ生まれた文芸誌。
- (5) 一九四四年四月に島内主要紙が統合されてきた新聞。
- (6) 「徴用作家たちの「戦争協力物語」」「よみがえる台湾文学」（東方書店 一九九六年）を参照。
- (7) 中島利郎『決戦台湾小説集』の刊行と西川満』『台湾の「大東亜戦争」』（東京大学出版会 二〇〇二年）を参照。
- (8) ただし、『決戦台湾小説集』収録の「助教」は単純計算で四〇〇字詰め原稿用紙換算で六〇枚超の長さになっており、枚数制限を大幅に超過している。
- (9) 近藤正巳「第三章 人心の動員」「総力戦下の台湾」（刀水書房 一九九六年）を参照。四三年一月時点で、改姓名をしたのは台湾人人口の二％だった。一方朝鮮では創氏改名実施半年で八三％が創氏させられている。

- (10) 記録映画「国民道場」「片格駆動間的台湾顕影」(DVD。台湾・国立歴史博物館 二〇〇八年)
- (11) 邱永漢「密入国者の手記」(一九五四年)や「濁水溪」(一九五四年)に、東京帝大在学中の台湾人学生が志願を迫られる場面描写がある。ただしこれが学生であることが条件の志願なので、その前に台湾へ戻ってしまえば兵員にならずに済んだ。
- (12) 和泉司「青年が志願に到るまで―周金波『志願兵』論―」『三田國文』四十一号(二〇〇五年六月)で論じている。